

多義ネットワークは何を示しているのか

山崎 香緒里

キーワード：多義語 多義ネットワーク 言語知識 ネットワークモデル
放射状カテゴリー

要旨

本稿は、認知言語学において仮定されている多義ネットワークの実在性を検証したとされる研究をいくつか取り上げ、実際にはそれらが多義ネットワークの実在性の検証とはなっていないことを示すことを目的とする¹。

今井（1993）は、母語話者と学習者を対象とした類似性判断テストの結果、両者の意味表象が根本的に異なることが示されたと述べ、学習者が貧困な意味表象しか持たないことが、上級学習者であっても多義語の習得が十分ではない原因の一つであるとした。また、森山（2015）は、母語話者に類似性判断テストを実施することにより、母語話者全体の共通認識に近づき、客観的な多義ネットワークを示す道筋ができたとしており、母語話者に共通の知識として、そのようなネットワークが存在していることを示唆している。さらに驚見（2013）は、「ミチガエル」の使用の一部が、人によっては行われなくなっていることを示したうえで、その用いられなくなった意味は、多義ネットワークから失われると述べている。これらの研究で、多義ネットワークが、話者の言語使用に影響を与える言語知識であると捉えられているのは明らかである。その場合、母語話者の中でも、ある多義ネットワークを持つ話者と、それを持たない話者では、言語使用に差が出るはずである。しかし、どの研究においても、そのような相違があることは示されていない。実際には、これらの研究における多義ネットワークは、ある多義語の用例を集め、それらがどのように関連しあっていると考えることが可能なのかを、認知言語学者の視点からまとめ上げることで構築されている。

以上のことから、これらの研究が、「言語知識としての多義ネットワーク」の存在を前提とし、その検証を目標に掲げながら、実際には「記述の道具としての多義ネットワーク」の研究にとどまっており、言語知識の解明を目指す認知言語学の研究となりえていないことがわかる。

1. はじめに

本稿では、認知言語学において多義ネットワークの実在性を検証したとされる研究をいくつか取り上げ、実際にはそれらが多義ネットワークの実在性の検証とはなっていないことを示す。

認知言語学では、それまでの意味論において深く研究されることのなかった多義現象を、長年にわたり研究の題材としている。多義語の意味カテゴリーが、認知言語学が採用するプロトタイプ的カテゴリー観（Rosch, 1973, 1978）の裏付けになりうるということが、その理由の

¹ 本稿は、「人工物としての多義構造？—多義の実在論を疑ってみる」（早稲田大学言語学シンポジウム「多義の言語学と哲学」2015年12月12日）をもとにしている。その際、多くの示唆を与えてくださった、酒井智宏先生、西村義樹先生、長谷川明香さん、山口征孝先生に、心から感謝申し上げる。

一つである。そのため、認知言語学では、一つの音形が持つ複数の意味が形成する多義語の意味カテゴリーも、プロトタイプ理論による記述が可能であると仮定されている。この認識は、認知言語学の枠組みで多義研究を行うすべての研究者によって共有されていると言えよう。しかし、多義ネットワークが正確に何を示したものであるのかについては、研究者によって認識が異なる。

多義ネットワークは、Brugman (1981) の登場以降、認知言語学の枠組みの中で研究され続けている。Brugman (1981) の“over”の研究を、Lakoff (1987) がより詳細なものに発展させ、多義語の複数の意味が、プロトタイプを中心に広がる放射状カテゴリー (radial category) 形成していると主張した²。その中で、ある多義語の持つ複数の意味は、一見それらの間に関連性がなく、散在しているように見えても、実際はそれらの間に動機づけを認めることができ、一つの構造化されたカテゴリーとして捉えることができると指摘した。多義語の意味カテゴリーの中には、よりプロトタイプ的な意味から、周辺的な意味まで様々なレベルのものがあり、周辺的な意味は、よりプロトタイプ的な意味からの動機づけによって拡張していると考え、多義現象をより整然とした形で示すことができる。Brugman (1981) および Lakoff (1987) は、多義ネットワークの心理的実在性には深くコミットしておらず、あくまで、多義語のカテゴリーを示した多義ネットワークを、複数の語義の間のつながりを明示的に示した図として道具的に捉えている。これらの研究は、その後の多義研究に大きな影響を与え、英語の他の語や、他の言語における“over”の対応語の多義ネットワーク研究が、数多く行われるようになった (Taylor, 2012:233)。

一方で、話者がある多義語を使いこなせるのは、その語の多義ネットワークが心理的に実在するためであるとし、これを言語知識の一部と捉える立場の研究もある。今井 (1993) は、学習者にとって多義語の習得が難しく、上級者でも十分に使いこなせないことが多いのは、学習者が母語話者とは異なった意味表象を持っているためであるとしている³。また、森山 (2015) は、自らの内省によって作成した多義ネットワークをもとに、母語話者に類似性判断テストを実施し、構築したネットワークが母語話者の言語知識を反映したものであることが裏付けられた主張する。ここでは、多義ネットワークが母語話者の言語知識として実在することが最初から前提とされている。さらに、鷲見 (2013) では、「ミチガエル」

² 多義をネットワークとして捉える研究は他にもある。Langacker (1987) では、より上位概念であるスキーマを取り入れ、多義語の意味拡張の縦の関係を示したネットワークモデルが提唱された。Langacker (2006) によると、ネットワークモデルは放射状モデルを包含する概念である。放射状モデルと同様、ネットワークモデルも認知処理や言語知識を直接表したモデルではないことも明示されている。また、Tuggy (1993) は、多義語を単義語と同音異義語の中間に位置づけられるとし、その存在を fuzzy なものとして捉えることを提案した。これにより、ある語義どうしは多義の関係なのか同音異義の関係なのかという長年の問題に対して、それは程度問題であり、境界を明確に定める必要はないと答えることができるようになる。しかしこのような知識すら、言語知識であるとは言えない (Tuggy 自身も指摘するように、このモデルも言語知識自体を示しているわけではない)。ここにあげたどのモデルが示しているものも、道具的な多義ネットワークであると言える。

³ 今井(1993) では、「意味表象」とされているが、多義ネットワークとおおよそ同じものである。他に、多義構造、意味ネットワーク、意味構造など、複数の用語が使われることがある。

の使用の一部が、人によっては行われなくなっていることを示したうえで、その用いられなくなった意味は、ミチガエルの多義ネットワークから失われると述べている。この驚見の議論もやはり、多義ネットワークの心理的実在性を前提としたものにほかならない。

以下では、これらの研究が、当の研究者自身の想定に反し、実際には多義ネットワークの実在性の検証となりえていないことを示す。

2. 多義ネットワークの検証

2.1. 今井(1993)

多義は、その研究が始まって以来、現在も、“Polysemy is commonly defined as the association of two or more related meanings with a single linguistic form.” (Taylor, 2012: 219) と定義される⁴。そして、一つの形式の二つ以上の意味 (related meanings) は、メタファー、メトニミー、シネクドキーなどの動機づけによって、互いに関連づけられていると言われている (テイラー&瀬戸, 2008)。

このような、多義語の複数の意味が互いにどのように関連しているかという知識は、母語話者が語彙について持っている知識の一部をなしていると考えられることも多い (今井, 1993)。すなわち、意味間の関係性についての知識を持ちあわせていることが、母語話者が多義語を自由に使いこなせている理由の一つであるとする立場である。この立場からすると、このような知識は、母語話者の言語使用に影響を及ぼす言語知識の一部となる。

今井 (1993) は、外国語学習者にとって多義語の習得が困難な理由を、学習者と母語話者の多義ネットワークの違いに求めている。外国語学習者は、目標言語の多義語のある使用に出会ったとき、「母語と対応する非常に限られた範囲のみを当該の語の意味として受け入れる」(p.245) 傾向にあるという。そして、それ以外のものは、「たとえ文脈から意味が明らかであっても、その語の多義カテゴリーの一部としてではなく、同音異義語の様にみなしてしまう」(p.245) ため、多義語の使用がいつまでも十分ではないと述べている。それに加え、「意味カテゴリーを構造化しているメタファーを理解しないため、いつまでもたっても語の適用範囲を拡張できず、点のみからなる痩せた表象から脱皮できない、という悪循環が存在しているのではないだろうか」(p.245) という記述もある。ここからも、今井は、意味の関連について理解していないと正しい使用はできず、学習者が多義語を十分に使いこなせないのはメタファーを理解していないことに原因があるとしており、多義語の複数の意味の間の関連性は、言語知識 (言語の使用を可能にする知識) の一部であると捉えられていることがわかる。

今井 (1993) はこの仮説を検証するために、カード分類法による類似性判断テスト (Miller,

⁴ Taylor (2012:219) はこの定義に関して、いくつかの点で問題があることを指摘している。具体的には、何をもって一つの形式と定めるのか、異なる複数の意味かどうかをどのように確かめるのか、複数の意味間の関連を認めるかは、極めて主観的にしか定めることができないなどの問題が指摘されている。

1969) を行った。その結果を MDS⁵によって分析したところ、英語母語話者の結果は、二次元空間においてクラスターが小さくまとまり、整然とした構造を示していたのに対し、日本人英語学習者の結果では、クラスターが拡散的で、母語話者と同じようなまとまりのあるクラスター構造を呈していないことがわかった (図 1, 2)。また、英語母語話者の結果には、比喩転用クラスターの中により詳細な構造が見られたが (図 1 の左側のクラスターを参照)、学習者の結果においては、そのような、比喩転用クラスター内での、プロトタイプを中心にした放射構造は見られなかった (図 2 の左側のクラスターを参照)。さらに、この結果から、日本人対象者が、“wear”の比喩転用クラスターの底流となるメタファーや、周辺義がプロトタイプからどのように転用されたのかを理解していないことがわかって述べている。

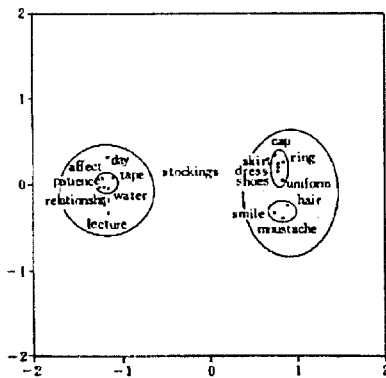


図 1 英語母語話者の意味表象

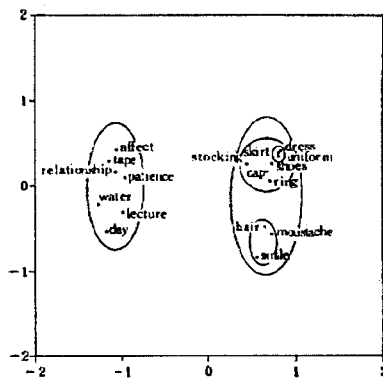


図 2 日本人英語学習者の意味表象

(今井, 1993: 247)

今井によると、母語話者と学習者の実験結果における大きな相違は、両者の多義語“wear”の意味表象が根本的に異なるものであるという事実を示している。この考え方が正しければ、今井が調査対象とした上級レベルの学習者でさえ、英語の基本語の貧弱な意味表象しか持っていないことになる。ここから今井は、現在の語彙教育には問題があり、「外国語教育の初めから、語の意味はカテゴリーとして理解されるべき」(p.251)であると主張した。

このように、今井 (1993) は、母語話者と学習者の持つ意味表象の違いが、実際の彼らの言語使用の違いとして現れるとする見方に立っている。しかし、今井の実験結果に対しては別の解釈も可能である。確かに、母語話者の実験結果はまとまったクラスター構造を示したのに対し、学習者の結果は拡散的でまとまりがないように見えた。しかしながら、この実験結果は、母語話者と学習者のデータをそれぞれ統合し、それぞれのグループ間にどのような傾向があるのかを示したものであり、豊かな表象を持つ話者は、十分な多義語の使用ができ、貧困な表象しか持たない話者は、十分な使用ができないことを示したこと

⁵ Multi-dimensional scaling (多次元尺度構成法) の略である。今井 (1993) では、実験の結果、多くの対象者に「類似している」と判断された語義どうしほど、より近くプロットされるようになっている。

にはならない。それを示すためには、それぞれの表象を持つ話者の言語使用が異なることを確かめなければならない。例えば、豊かな表象を持つ傾向にある母語話者の中でも、より豊かな表象を示した対象者と、より貧困な表象を示した対象者の言語使用を比較し、貧困な表象を示した対象者のほうが、言語使用に困難があることを示して初めて、言語知識としての多義ネットワークを認める解釈ができるようになる。しかし、現実的には、実験で異なる表象を示した（類似性判断テストで、異なる分類をした）からと言って言語使用に大きな差が出るとは考えにくい。したがって、この実験により示されたのは、あくまで、対象者が“wear”の用例を、どのように分類したいと思ったかにとどまり、多義ネットワークが、母語話者や学習者の言語使用に影響を与えるような言語知識に含まれると結論することはできない。この実験が示すのは、多義語（wear）の用例を、どのように整然と表すことができるかにとどまっている。

2.2. 森山(2015)

森山（2015）は、内省分析で明らかにした多義ネットワークの妥当性について、心理的手法を用いて検証することを課題として、これまで内省に頼りがちで、客観性に乏しかった多義ネットワーク研究の改善を試みた。客観性の保証のため、日本語の多義動詞「切る」について、内省分析を行った森山（2012）を内省データとし、それをもとに、カード分類法による類似性判断テスト（Miller, 1969; 今井, 1993）を実施した。

類似性判断テストでは、今井（1993）に倣い、対象者に、「切る」を含む一文がそれぞれ書かれたカードのセットを与え、各文の「切る」の意味の類似性に基づいた分類を求めた。その際、作るグループ数と各々のグループ内のカードの数は自由とした。また、文はすべて文法的にも意味用法的にも正しいこと、グループ分けは「切る」の各文の文脈上での意味の類似性のみに基づいて行われるべきである（主語や目的語の類似性によって分類してはいけない）ことを教示した。その結果を、SPSSを用いてクラスター分析した⁶。

内省と心理実験の結果を比較すると、両者の一致する部分と一致しない部分があった。森山は、一致していた部分では、内省分析が検証されたと判断し、一致しなかった部分は、再検討の余地があるとした。一致しなかった部分には、心理実験の結果に従って修正される部分と、研究者による内省分析の結果を取り入れ、実験の結果には従わない部分があった。

まず、内省と心理実験の結果が一致したものとして、「花札をきる・トランプをきる」、「カーブをきる・ハンドルをきる」、「十秒をきる・半数をきる」などのグループがあげられる。これらについての実験結果は、内省分析と一致したため、正しかったと判断され、内省の検証の材料とされた。

一方、一致しなかった部分で、母語話者への実験の結果に従ったのは、「敵をきる・腹を

⁶ 森山（2015）は今井（1993）に倣い、MDSでの分析も行ったが、Stress値が高く、信頼できるデータとは言えないと判断し、この分析結果を考察に用いることはしなかった。

きる」のグループと、「政治の腐敗をきる・世相をきる」のグループの、意味の「近さ」に関する記述であった。もともと内省分析では、この二つのグループはかなり近い意味であると考えられ、「政治の腐敗をきる・世相をきる」のグループは、「敵をきる・腹をきる」のグループの下位分類であるとされていた（森山（2012）では、「敵をきる・腹をきる」が<3>、「政治の腐敗をきる・世相をきる」が<3a>とされた）。しかし、母語話者への実験の結果、母語話者には、これらのグループは、互いに遠く感じられていた（クラスター分析により、「敵をきる・腹をきる」と「政治の腐敗をきる・世相をきる」のクラスターの関係が稀薄であるという結果が得られた）。そのため、これらの分類に関しては、母語話者の判断に従い、下位分類ではなく、「独立した語義に改め（る）」（森山, 2015:151）とした。

また、一致しなかった部分のうち、実験結果ではなく言語学者による内省分析の結果に従ったのは、「糸をきる」、「缶をきる」、「胃をきる」、「敵をきる」の分類方法と、「小切手をきる・領収書をきる」、「トランプをきる・花札をきる」の分類方法であった。まず前者については、森山（2012）は内省によりそれぞれを、別々の四つのグループにしたのに対し、母語話者は四つを同じグループにしていた。内省分析では、「糸を切る」がプロトタイプ義で、他の三つは、プロトタイプからのメトニミー拡張義であると判断されていた。森山（2015）は、母語話者は、メトニミーの拡張に気づくことができず、同じグループにしてしまったと判断し、言語学者の内省分析をより正しいものとして採用した。後者のグルーピングに関しても、言語学者が、二つのグループを分けていたのに対し、母語話者は同じグループにする傾向が見られた。「小切手をきる・領収書をきる」、「トランプをきる・花札をきる」はすべて、目的語にカードの形状をしたものをとっている。そのため、目的語の類似性による分類が禁止されていたにもかかわらず、実験参加者が目的語に類似性に惑わされて誤った分類をしたものと結論し、ここでも内省分析の結果に従った。このようにして、心理実験により、内省が補填され、より忠実な（言語知識としての）多義ネットワークを示すことができたとした。

このような、言語知識としての多義ネットワークを認める立場に対し、異議を唱える立場も存在する。Taylor（2012:229）は、語の意味カテゴリーの拡張関係に関する知識は、母語話者の言語知識ではないと主張する。語の意味が、ある中心的な意味からメタファーやメトニミーなどの動機づけによって拡張していると捉えているのは言語学者であり、一般の母語話者は、そのような知識を言語知識として持ち合わせていない。母語話者は、メタファーやメトニミーによる動機づけなどの、多義ネットワークに関する知識を持っていないといまいと、また、どのような多義ネットワークを考えていようと、十分な多義語の使用ができていない。言語学者は、意味間の拡張関係を考えずにはいられないが、そのようなメタ的な洞察は、言語の堪能さや熟達には必須なものではない。同様に、野矢（2011:439）も、言語を使用するために、メタファーをメタファーとして認識することは必須のことではないと述べている。

実験解釈にあたってこうした慎重さが求められることは、実はかなり早い時期から気づ

かれていた。Sandra and Rice (1995) は、カード分類法による実験について、分類実験の結果、クラスターが形成されるのは、対象者の mental lexicon の中に、クラスター間の関係が実際にあるからなのか、単にタスクによる効果なのかは不明瞭であると述べ、実験によって多義ネットワークやクラスターの存在が立証されたと考えるのは早計であると主張する。実際、今井 (1993) や森山 (2015) で取り入れられた、カード分類法による類似性判断テストでは、分類の粒度の指定はなく、どのような粒度でも分類することができた。さらに、対象の語の意味の類似性のみによって分類するように指示したが、何と何が類似しているかは、文脈に左右される。対象者が、どのような類似性があるのかを、対象語のみから判断することは困難であり、たとえ母語話者であっても、類似性の感じ方には、ばらつきがあると考えられる。したがって、この分類実験は、原理上はどのように分類することも可能な実験であったと言わざるを得ない。

内省と心理実験の双方を用いた森山 (2015) の実験解釈においては、どのような場合に、内省分析と心理実験のどちらの結果に従うかの判断基準は示されていない。これはすなわち、実験結果に対する恣意的な解釈が可能であるということである。多義ネットワークに関する実験の結果にいつこうに収束が見られないのは、一つにはそれが原因であると考えられる。多義ネットワークが言語知識であるならば、もちろん個人によって詳細が異なることはあるものの、研究を重ねるうちに、ある程度の収束が見られるはずである。しかし、実際にはそれぞれの研究によって構築されるネットワークに大きな差があり、収束に向かっていないという事実は、森山 (2015) およびそれと類似の手法を用いる研究が、内省の段階にせよ、心理実験の段階にせよ、母語話者の言語知識を記述したものではないことを物語っている。

2.3. 鷺見(2013)

さらに、鷺見 (2013) は、ミトオス、ミチガエル、ミアヤマル、ミマチガエルという四つの類義語の具体的な用例分析を行い、それらの用法の違いが、多義ネットワークの違いに帰せられることを示唆している。鷺見はまず、ミチガエルが①、②の二つの意味で用いられていること、最近になってさらに③の意味でも使用されるようになってきていることを指摘する。

- (1)① 「<主体が><対象を><視覚で捉え><別のものと錯覚する>
 (更迭を更送と見違え、「こうそう」と読んでいた。)
- ② 「<主体が><対象を視覚で捉え><別のより良いモノであると><認識する>
 (20年ぶりに会った友人は見違えるようにきれいになっていた。)
- ③ 「<対象が><別のモノであると認識されるような><プラス方向の><変化をする>
 (玄関周りがきれいに見違え、家族も猫も大喜びのリフォームだったようです。)
- (鷺見, 2013: 40, 41, 42)

一方で、ミマチガエルにも注目し、ミマチガエルは (2) の意味で使用されるとする。

(2)①「<主体が><具体物を><視覚によって><別のものと錯覚する>」

(臭←この字を“臭”と見間違えたことがある)

②「<主体が><事柄を><別の事柄と取り違える>」

(…これは、本質を見間違えているのではないかと思うのです…)

(鷺見, 2013: 44)

ミチガエルとミマチガエルの意味を比較すると、ミチガエルの①と、ミマチガエルの①が同義関係であるということが出来る。このように、同じ意味を表す複数の形式が存在する場合、多義ネットワークの再構成が行われ、語の差異化が行われることがある。鷺見は、ミチガエルとミマチガエルについては、「人によっては両語を使い分け、ミチガエルの意味ネットワークから意味①が喪失しつつあるようだ」(p.47)と述べ、意味①を使用しなくなった話者が、その意味を多義ネットワークから喪失する可能性を示唆している。

この研究においても、多義ネットワークが、話者の言語使用に影響を与える言語知識として捉えられ、その解明を目指していることが見てとれる。しかし、鷺見が行ったのは、それぞれの語の用例を収集し、それらの関係を示すという作業のみである。そこで示された関係が、母語話者の言語知識を(部分的にすら)反映しているという保証はない。つまり、この研究においても、示されたのは道具としての多義ネットワークであるということになる。鷺見自身も自らの手法の限界を認識しており、「ネットワークの心的実在性を検証する研究の進展が望まれる」(p.48)と付言している。しかし、これまでに見た通り、多義ネットワークは心理実験などの手法により検証されうるものであるかどうかについては疑問の余地がある。

3. Story of OVER はなぜ成功したのか

これまで示してきたように、内省により作成した多義ネットワークの正しさを、実験によって検証することには限界がある。しかし、このことは、多義ネットワークの作成が常に無意味であるということは意味しない。

Brugman (1981) や Lakoff (1987) による、多義性の高い英語の前置詞“over”の研究には、多くの研究者が賛同し、それに続こうとした。それはこれらの研究が、話者の知識の中で、意味 A から意味 B へ拡張している、のような議論を展開していないことに起因すると考えられる。つまり、これらの研究では、多義ネットワークは、話者の言語知識としてではなく、“over”の実際の使用を論理的に説明するための道具として捉えられている。実際に、Brugman (1981) では、“... I am trying to explicate what it is that makes us feel that the senses are related ...” (p. 12) と述べられている。すなわち、これらの研究は、言語使用を可能にする言語知識としての図を描いているのではなく、ある「一つの語」と思える語の複数の用法を、どのように関連していると説明することが可能なのかを示した図として、多義ネット

ワークを描いているのである。

このように、多義ネットワークを、記述の道具であると捉えると、話者が多義ネットワークを知識として持っていて、中心義からメタファーなどを利用して、拡張義を理解したり使用したりしている (Lakoff&Johnson, 1999: 166) とは言えなくなる。実際に、多義性の高い英語前置詞“by”についての研究で、平沢 (2015) は、「英語の前置詞 by の時間用法と空間用法について、メタファーの関係が指摘できないケースもあることと、指摘できた場合でも、だからといって『空間用法の知識を利用して時間用法を生み出す計算を、発話の場で毎回行っている』ということにはならないこと」(p. 52) を指摘している。このことから、多義ネットワークを言語知識として描こうとすることに、問題がある可能性が窺える。

先に見た、森山 (2015) は、話者の頭の中にある知識を妥当な形で示そうと、内省に加え、母語話者への心理実験を行い、多義ネットワークを構築した⁷。しかし、多くの話者に共有されるイメージを探ることと、妥当な説明を与えることは異なる。妥当な説明を与えるためには、話者の知識として、用例どうしが類似しているかという議論ではなく、用例間に論理的な関係性を見出すことができるかという議論をしなければならない。論理的な関係性とは、話者が類似していると感じるかどうかで決定されるものではなく、Brugman (1981) や Lakoff (1987) のように、意味を決める要素が、ある用例間で共有されているかどうかで決定されるものである。

Brugman (1981) や Lakoff (1987) は、ある語の新奇な用法が現れる際に、どうしてその用法がなされるようになったのかということ、メタファーやメトニミーなどの動機づけによって説明できることを示した。これらの研究は、それまで単に、単義語の複数の現れに過ぎないとされていた多義現象を、人間の一般的認知能力 (カテゴリー化・プロトタイプ性) を反映したものであると捉え直した点で大きく評価される。これらの研究は、多義研究に大きく寄与したが、話者が多義ネットワークのような知識を持っているということを示したのではない。あくまで、多義ネットワークは、ある語の用例の説明に、道具的に用いられているのである。つまり、道具的使用のための多義ネットワークは、それぞれの使用が、どのような共通要素を持っているかということ論理的に考察し、ある語の用例の整理をする手段として、役割を果たすことができる。

これまでの多くの多義ネットワークの研究が、Brugman (1981) や Lakoff (1987) に影響を受けている。しかし、これらの研究が、多義ネットワークを記述の道具として扱っていることには注意が向けられず、後に続いた研究は、示そうとしているもの (言語知識) と、示したもの (記述の道具) とに間に、齟齬をきたしている。

⁷ 森山 (2015) は、「本稿で明らかにしようとしているのは (一般の) 母語話者が構築している意味構造はどのようなものかである (る)」(p. 153) とも述べており、それが言語知識として母語話者の中に存在するものとして捉えられていることは明らかである。

4. おわりに

本稿では、認知言語学において仮定されている、多義ネットワークの实在性を検証したとされる研究をいくつか取り上げ、実際にそれらの研究が示したものは、多義ネットワークの实在性の検証とはなっていないことを示した。

認知言語学における、多義ネットワークの研究は、今一度、何を目標に、どのような立場に立って研究を行っているのかを明らかにした上で、その研究結果が何を示しているのかを再考する必要がある。

現在行われている、多義ネットワークの研究の多くは、Brugman (1981) や Lakoff (1987) の影響を受け、多義ネットワークは、プロトタイプを中心とした、放射状カテゴリーの構造を成していると捉えている。しかし、Brugman (1981) や Lakoff (1987) が、そもそも何を示そうとして、そのような多義ネットワークを提唱したのかについては、後に続いた研究では、注意が向けられず、引き継がれていない状況にある。彼らがもともと示そうとしていたのは、「どうしてある語は、一語の多義語だと感じられるのか」を説明する方法であった。その説明のために、認知言語学で用いられている、プロトタイプや、メタファー、メトニミーなどの概念を使用し、多義ネットワークを仮定した。つまり、多義ネットワークは、この時点では道具的に扱われていた。

しかし、現在では、多くの認知言語学における多義ネットワークの研究が、多義ネットワークを話者の言語使用に影響を与える言語知識であると捉え、その検証のため様々な方法をとっている。それには、認知言語学が、「言語使用を可能にする（大部分暗黙の）知識とは何かを明らかにするという目標」（『明解言語学辞典』『認知言語学』）を立てているという事実が関わっている。認知言語学の研究者が、多義ネットワークの研究も、その目標に沿わせようとした結果、多義ネットワークも言語知識であるはずだ、という考えに陥り、それを検証しようという動きが生じていると考えられる。本稿で取り上げた、今井 (1993)、森山 (2015)、鷺見 (2013) も、そのような立場の研究の一部である。

しかしながら、言語知識としての多義ネットワークを示す手段を我々は持たない (Sandra and Rice, 1995)。これまで、多義ネットワークの検証に励んできた研究が、言語知識を示しているとは言えず、それぞれの語の使用を、どのように整理することが可能か、という議論の域を出ていない。つまり、これらの研究では言語知識の検証ができていたとは言えない。

研究者によって構築される多義ネットワークモデルが、自動的に現実の言語知識を反映したものであると考えることはできない。それにもかかわらず、多くの研究で、十分に反省されることもなく多義ネットワークが言語知識の一部をなすと想定され、その想定を正当化する努力が行われないうまま、多義ネットワークの検証方法までもが検討されている。しかし、そのような研究によって検証されたとされる多義ネットワークは、「道具としての多義ネットワーク」にとどまっており、これらの研究が言語知識の解明を目指すという認知言語学の目的と整合的であるかどうかは疑わしい。

参考文献

- Brugman, C. (1981) *The Story of Over: Polysemy, Semantics and the Structure of the Lexicon*. New York: Garland.
- 今井むつみ (1993)「外国語学習者の語彙学習における問題点」『教育心理学研究』41, 243-253.
- 平沢慎也 (2015)「Metaphors We Don't Live By: 現代英語母語話者はbyの時空間メタファーを使って生きているか」『東京大学言語学論集』 36, 39-55.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Lakoff, G and M. Johnson. (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Miller, G. A. (1969) "A Psychological Method to Investigate Verbal Concepts" *Journal of Mathematical Psychology* 6, 169-191.
- 森山新 (2012)「認知意味論的観点からの「切る」の意味構造分析」『同日語文研究』 27, 1-14.
- 森山新 (2015)「日本語多義動詞「切る」の意味構造研究—心理的手法により 内省分析を検証する—」『認知言語学研究』 1: 138-155.
- 野矢茂樹 (2011)『語りえぬものを語る』東京: 講談社.
- Rosch, E. (1973) "On the Internal Structure of Perceptual and Semantic Categories," *Cognitive Development and the Acquisition of Language*, ed. by T. Moore, 111-144, Academic Press, New York.
- Rosch, E. (1978) "Principles of Categorization," *Cognition and Categorization*, eds. by E. Rosch and B.B. Lloyd, 27-48, Lawrence Erlbaum, Hillsdale, New Jersey.
- Sandra, D. and S. Rice. (1995) "Network Analysis of Prepositional Meaning: Mirroring Whose Mind — the Linguist's or the Language User's?" *Cognitive Linguistics* 6, 89-130.
- 鷺見幸美 (2013)「多義性の意味ネットワーク」, 森雄一、高橋英光 (編著)『認知言語学基礎から最前線へ』 東京: くろしお出版, 29-52.
- Taylor, J. R. (2012) *The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*. Oxford: Oxford University Press.
- テイラーJ. R.&瀬戸賢一 (2008)『認知文法のエッセンス』, 東京: 大修館書店.
- Tuggy, D. (1993). Ambiguity, polysemy, and vagueness. *Cognitive Linguistics (includes Cognitive Linguistic Bibliography)*, 4(3), 273-290.

参考辞書

- 『明解言語学辞典』(2015) 東京: 三省堂.

What do Polysemy Networks Represent?

Yamasaki Kaori

Keywords: polysemy, polysemy networks, linguistic knowledge, network model, radial category

Abstract

The purpose of this paper is to show that some of the studies on polysemy networks generally considered to have verified their reality have not in fact succeeded in doing so.

Imai (1993), with the support of results from psychological experiments, concludes that native speakers and second language learners have fundamentally different semantic representations, suggesting that the lack of native-like semantic representations makes it difficult for second language learners, including those who are advanced, to acquire the proper usage of polysemous words. Moriyama (2015) claims that psychological experiments on native speakers can reveal the polysemy networks that those speakers share, thereby substantiating the reality of polysemy networks as postulated through introspection. Sumi (2013) attributes the obsolescence of some uses of the Japanese verb *michigaeru* to the partial reorganization of the polysemy network associated with this word that native speakers are supposed to have in their minds/brains.

An underlying assumption shared by these studies, all of which draw on the framework of cognitive linguistics, is that polysemy networks are part of the linguistic knowledge of native speakers. If this assumption is valid, different networks associated with a given word should give rise to different uses of that word. No research, however, has ever established the validity of this very assumption. Unless the reality of networks is confirmed, most of the research that has been conducted on this subject can at best be viewed as only providing an instrumentalist conception of word meaning. Instrumentalism, as it stands, cannot be expected to elucidate the structure of our linguistic knowledge.

(やまさき・かおり お茶の水女子大学大学院)